

「現代語訳 濱口梧陵傳」から

<新聞ニュースから>

広八幡神社の境内、森の中に大きな石碑が建っています。これは、濱口梧陵翁の親友勝海舟が翁が亡くなった後、梧陵翁の一代記を書いたものです。「濱口梧陵傳」の中から抜粋します。

枢密院顧問官従三位勲一等伯爵勝安房
撰文及題額

濱口成則字は公輿、俗称は儀兵衛、梧陵は号である。和歌山県紀州有田郡広村に生まれた。生家は村の豪族であった。人となりは度量が広く聡明、多くの書物を読み、^{そらいがく}徂徠学を好んだ。若くして大志を抱き、広く国内の有名な学識者と交流し、国内外の情勢について多くの意見を持っていた。幕府が鎖国を解いた時、君は、現在の急務は外交にある、外交の要点は徳と威力をもって外国と接することで、それが出来なければ、戦をして、その後和解することが一番だと語ったという。かつて知り合いの役人に就いて、海外へ渡航し海外情勢を見たいと謀ったことがある。皆の賛同と助けを得たものの幕府内の論議が延びて、その志は果たされず、君は憤り嘆いて故郷に帰り、故郷の若者たちの教育に従事した。文においては^{もつぱ}道徳を経済に優先させ、武においては専ら西洋の方式を採って銃陣を編成して練習した。この感化を受けて紀州藩全体にも士気が次第に高まって、紀州公の藩政改革に際しては参政に抜擢された。明治四年、和歌山藩権大参事に就任してから駅逡正及び駅逡頭を歴任したのち和歌山県大参事となり、同免官後、すぐに和歌山県参事に再任されたのち官職を辞した。

<つづく>

5月24日の産経新聞一面に「南海トラフ 四国沖ひずみ蓄積」という大きな見出しが載っていました。

南海トラフで起きる地震の想定震源域に蓄積しているひずみの詳細な分布が、海上保安庁の海底観測で初めて明らかになった。というものでした。



記事の内容は、素人の我々にとって理解し難いものですが、海側のフィリピン海プレートが日本の陸側に沈み込んでいく。この沈み込みが大きくなるとはじける時に地震が発生し、津波が

起るといふことです。

南海トラフ地震とは、駿河湾から日向灘にかけて延びる浅い海溝の南海トラフ沿いで発生する大地震で、昭和19年にマグニチュード7.9の昭和東南海地震、21年に8.0の南海地震が発生したが、東海地震はその後もし起きていない。国は震源域全体のどこかでマグニチュード8～9級が30年以内に起きる確立を70%と算出しているという。

<稲むらの火の館の紹介>

濱口梧陵記念館／津波防災教育センター

〒643-0071 住所 広川町広671

TEL : 0737-64-1760 / FAX : 0737-64-1761

http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamurano hi/

*開館時間：午前10時～午後5時（受付終了4時）

*休館日：月曜日・火曜日（祝日開館）

年末年始（12/29～1/4）

*記念館だけの入場は無料です。